

# 令和5年度 土木工事標準歩掛改定概要

国土交通省 大臣官房 技術調査課 施工企画室  
(旧 総合政策局 公共事業企画調整課 施工安全企画室)

## 1. はじめに

土木工事標準歩掛（以下、「標準歩掛」という）は、土木工事に広く使用されている工法について、施工合理化調査等の実態調査に基づき、土木施工に必要とされる標準的な機械、労務、材料等の所要量を工種毎に設定しています。

この標準歩掛は「中央建設業審議会（中建審）」の建議を踏まえて、昭和58年3月に整備・公表し、その後、改定や制定を重ねて現在に至っており、土木工事費の積算の基礎資料として、国、県、市町村の発注官庁をはじめ、民間でも標準的な指標として広く活用されています。

## 2. 令和5年度標準歩掛の改定概要

標準歩掛は、使用機械の機能向上、新技術・新工法の開発、あるいは各種施工制約などの社会情勢の変化など、施工形態の変化に対応した適正なものとする必要があります。

今回、令和3年度に施工合理化調査等を実施した標準歩掛工種の124工種のうち、令和4年度に施工実態を分析した結果、10工種の改定を行うこととしました。

その10工種の改定概要について、以下のとおり紹介します。

## 3. 新規制定工種（3工種）

### (1) 浚渫工（バックホウ浚渫船）（ICT）

#### ① 工法概要

浚渫工（バックホウ浚渫船）（ICT）は、河川等の河床に堆積した土砂等を浚渫するため、マシンコントロールまたはマシンガイダンスを装備したバックホウ（ICT）をスパッド付台船等に搭載したバックホウ浚渫船（ICT）により施工する工法です。掘削された土砂は、土運船等に積込み、引船により曳航し、海上処分または陸上の処分地に揚土します。

ICT機器を搭載したバックホウ浚渫船による施工がみられたため、新たに制定しました。

#### ② 制定概要

##### 1) 適用範囲

・河川におけるバックホウ浚渫船（ICT）による浚渫工の施工に適用する。また、適用する土質は、粘性土、砂質土及び砂、レキ質土等とする。

##### 2) 施工歩掛

・浚渫のほか、繫船、浚渫土の運搬、浚渫土の揚土作業までの一連作業の施工歩掛を設定  
・施工歩掛として、掘削深度を考慮して機械を2

規格設定し、施工能力は土質、作業状況を考慮したサイクルタイムで設定

③ 機種を選定

機械・規格は、次表を標準とする。ただし、規格を選定する際には、以下の項目を考慮し、決定するものとする。

- 1) 浚渫深度（表－1 摘要参照）
- 2) 施工数量，工期，運転時間，土捨場の受入れ土量等

④ 浚渫船の運転

1) 浚渫能力（単位時間当たり浚渫量）

積算の基礎となる浚渫能力は、次式により算出し決定する。なお、1日当りの浚渫船の運転時間は、7時間を標準とする。

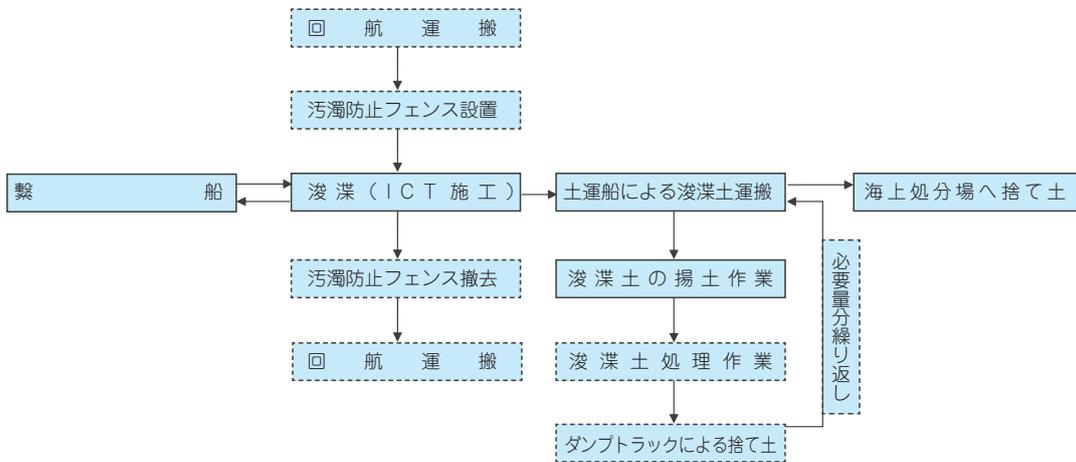
$$Q = 47.8 q \times a \times E$$

Q：バックホウ浚渫船（ICT）1時間当たり浚渫量（m<sup>3</sup>/h）

q：バックホウバケット容積（m<sup>3</sup>）

a：土質係数

E：作業係数



- (注) 1. 本歩掛で対応しているのは、実線部分のみである。  
 2. 汚濁防止フェンス又は汚濁防止枠および汚濁防止膜については、掘削時に濁水の拡散により、水質等の影響がある場合に、別途計上する。  
 3. 浚渫土処理作業については、浚渫土の処理時に発生する余水処理や運搬及び浚渫土の再利用時の固化処理であり、必要な場合は別途計上する。  
 4. 本歩掛には、浚渫作業中の浚渫船の引船運転を含む。

図－1 施工フロー

表－1 機種を選定

機械名	規格	単位	数量	摘要
バックホウ浚渫船 (ICT)	D 1.0 m <sup>3</sup>	隻	1	標準最大作業水深 4 m
	D 2.0 m <sup>3</sup>	々	1	標準最大作業水深 6 m

(注) 現場条件（現場の広さ、機械の搬入条件）により、上表により難しい場合は、別途考慮する。

表－2 土質係数 (a)

土質		係数
分類	N 値	
粘性土	10 未満	1.00
砂質土及び砂	10 以上 30 未満	0.68
レキ質土	30 以上 50 未満	0.56

表－3 作業係数 (E)

係数	作業係数適用条件
1.00	平均土厚が 1 m を超え、かつ浚渫区域が連続している工事
0.82	平均土厚が 1 m 以下、又は浚渫区域が点在している工事
0.70	平均土厚が 1 m 以下、かつ浚渫区域が点在している工事

(注) 平均土厚には、余掘厚が含まれる。



写真-1 バックホウ浚渫船 (ICT) による浚渫状況



写真-3 引船で土運船を曳航している状況



写真-2 バックホウに搭載した ICT 機器



写真-4 浚渫土の揚土作業状況

(2) 砂防土砂仮締切・砂防大型土のう仮締切

① 工法概要

砂防土砂仮締切・砂防大型土のう仮締切工は、砂防工（本・副堰堤、床固め等）の施工に伴い、現地土砂を用いた盛土、もしくは大型土のうで河川等の仮締切を行う工法です。

砂防工での施工実績が得られたことから新たに制定しました。

② 制定概要

1) 適用範囲

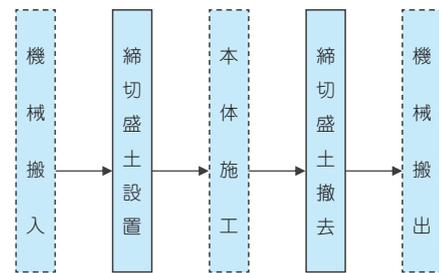
砂防工（本堰堤、副堰堤、床固め、帯工、水叩き、側壁、護岸）の施工に伴う現地土砂を用いた土砂及び大型土のうによる仮締切工に適用する。

2) 施工歩掛

- ・砂防土砂仮締切は、設置及び撤去の歩掛を設定
- ・砂防大型土のう仮締切は、製作、設置、撤去の歩掛を設定
- ・各作業における日当り施工量を設定し、日当り歩掛化

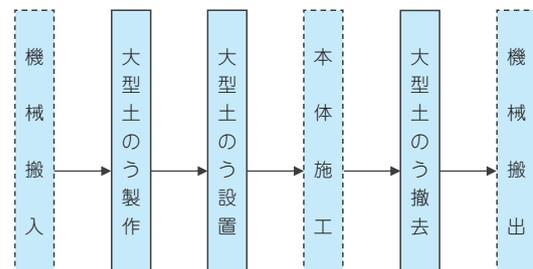
③ 機種の選定

機械・規格は、次表を標準とする。



(注) 本歩掛で対応しているのは、実線部分のみである。

図-2 砂防土砂仮締切施工フロー



(注) 本歩掛で対応しているのは、実線部分のみである。

図-3 砂防大型土のう仮締切施工フロー

表－4 機種の種類

作業種別		機械名	規格	単位	数量	摘要
砂防土砂仮締切	設置または撤去	バックホウ（クローラ型）	標準型・超低騒音型・ 排出ガス対策型（2011年規制） 山積 0.8 m <sup>3</sup> （平積 0.6 m <sup>3</sup> ）	台	1	
	製作・設置	バックホウ（クローラ型）	標準型・超低騒音型・クレーン機能付き・ 排出ガス対策型（2011年規制） 山積 0.8 m <sup>3</sup> （平積 0.6 m <sup>3</sup> ）吊能力 2.9 t	／	1	
砂防大型土のう仮締切	製作			／	1	
	設置			／	1	
	撤去			／	1	

- (注) 1. バックホウは、賃料とする。  
 2. 大型土のうの設置、撤去はバックホウによる施工で、作業半径 6 m 以下とする。  
 3. 現場条件により、上表により難しい場合は、別途考慮する。

表－5 日当り施工量

(1日当り)

作業種別	土の状態	土質名	単位	数量
設置または撤去	地山	レキ質土・砂・砂質土・粘性土	m <sup>3</sup>	99
		岩塊玉石	／	84
	ルーズ	レキ質土・砂・砂質土・粘性土	／	216
		岩塊玉石	／	180

- (注) 1. 作業範囲は、機械走行面より上下に 5 m 以内を標準とする。  
 2. 施工数量は、3,000 m<sup>3</sup> 未満（砂防土砂仮締切の 1 工事あたりのバックホウによる取扱い土量）を標準とする。現場条件により、これにより難しい場合は、別途考慮する。  
 3. 地山の現場条件は障害なし（作業現場が広い、作業範囲が標準内及び転石の混入等の影響による作業妨害が少なく、連続した掘削作業が出来る場合）を標準とし、これにより難しい場合は、別途考慮する。



写真－5 土砂による仮締切設置作業状況



写真－7 大型土のう設置作業状況



写真－6 土砂仮締切設置状況



写真－8 大型土のう仮締切設置状況

(3) 橋梁検査路架設工

① 工法概要

鋼橋やPC橋の橋台・橋脚、支承部等の橋梁各部の点検や保守を行うため、橋梁検査路を設置する工法です。

橋梁検査路について、施工箇所及び材質に変動がみられたため、新たに制定しました。

② 制定概要

1) 適用範囲

鋼橋・PC橋の橋台・橋脚・桁間へ橋梁検査路を設置する作業に適用する。

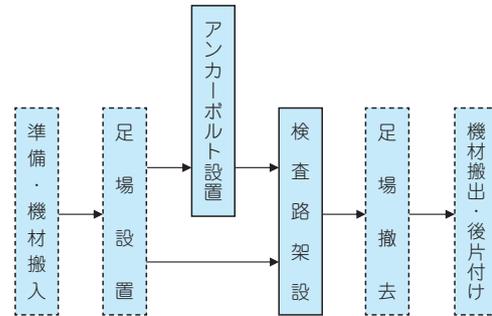
2) 施工歩掛

・鋼橋及びPC橋の新規及び更新工事の設置作業に適用する歩掛を新規に設定

ただし、工場における鋼橋製作に検査路が含

まれる場合や、旧検査路撤去に関する作業は含まない。

- ・検査路の材質は鋼製，アルミ製，FRP製に適用
- ・足場の有無によるアンカーボルト設置，検査路架設歩掛を設定



(注) 本歩掛で対応しているのは、実線部分のみである。

図-4 施工フロー

表-6 アンカーボルト設置歩掛

(100本当り)

名称	規格	単位	数量	
			足場有り	足場無し
土木一般世話役		人	1.2	
特殊作業員		人	1.3	
普通作業員		人	0.7	
アンカーボルト	各種	本	100	
高所作業車運転	トラック架装リフト(幅広デッキ、ブーム型)作業床高12m	日	-	1.1
諸雑費率		%	2	

- (注) 1. 本歩掛は、検査路を架設する際のアンカーボルト設置(コンクリート削孔含む)である。  
 2. 諸雑費は、ハンマドリル・発動発電機の損料、燃料等の費用であり、労務費の合計額に上表の率を乗じた金額を上限として計上する。  
 3. 足場の設置は、別途計上する。  
 4. 高所作業車は、賃料とする。  
 なお、現場条件等により上記の高所作業車規格により難しい場合は、別途考慮する。

表-7 検査路架設歩掛

(10m当り)

名称	規格	単位	数量	
			足場有り	足場無し
土木一般世話役		人	0.7	
特殊作業員		人	1.7	
普通作業員		人	0.8	
トラック運転	クレーン装置付ベストラック4t級 吊能力2.9t	日	0.71	
高所作業車運転	トラック架装リフト(幅広デッキ、ブーム型)作業床高12m	日	-	0.71
諸雑費率		%	0.3	

- (注) 1. 本歩掛は、歩廊設置を含まない場合は適用できない((例)昇降設備のみ設置等)。  
 2. 本歩掛は、トラック[クレーン装置付]により検査路を架設(現地組立、ブラケット設置、昇降設備設置含)するものである。  
 3. 諸雑費は、インパクトレンチ・チェーンブロックの損料の費用であり、労務費の合計額に上表の率を乗じた金額を上限として計上する。  
 4. 足場の設置は、別途計上する。  
 5. 高所作業車は、賃料とする。  
 なお、現場条件等により上記の高所作業車規格により難しい場合は、別途考慮する。  
 6. トラック[クレーン装置付]は、賃料とする。  
 なお、現場条件等により上記のトラック[クレーン装置付]規格により難しい場合は、別途考慮する。  
 7. 検査路の数量は、歩廊長(中心延長)とする。



写真-9 橋梁検査路設置状況



写真-10 アンカーボルト設置状況



写真-11 検査路架設状況

## 4. 改定工種（7工種）

### (1) 原動機燃料消費量

#### ① 工法概要

原動機燃料消費量は、建設工事に使用する建設機械等の燃料消費量の算出に使用するもので、建設機械等の運転に必要な燃料・油脂類・消耗品等を機種別に機関出力1kW当りに換算し、運転1時間当り燃料消費率で示したものです。

### ② 主な改定概要

#### 1) 施工歩掛

- ・排出ガス対策型（オフロード法2014年規制）の普及・拡大に伴う燃料消費率の見直し
- ・燃費基準達成建設機械認定制度の対象機種（ブルドーザ・バックホウ等）の普及による燃費効率の実態を反映
- ・排出ガス浄化装置の普及に伴い、高品位尿素水の使用量を見直し
- ・使用がみられなかった機種の廃止を含め87機種を改定

表-8 原動機燃料消費量（抜粋）

No.	機械名	燃料消費率（ℓ/kW-h）		摘要
		現行（抜粋）	改正（抜粋）	
1	ブルドーザ	0.153	0.144	
2	リッパ装置付ブルドーザ			
3	小型バックホウ			
4	バックホウ			
5	クラムシェル			
6	クローラローダ（トラクタショベル）			
7	ホイールローダ（トラクタショベル）			
8	バックホウ（クローラ型・ディーゼル／電気ハイブリッド型）	0.128	0.124	
9	ダンプトラック（オフロード・建設専用）	0.085	0.088	15t以上
10	ダンプトラック（オンロード）	0.043	0.040	
11	トラック			クレーン装置付を含む
12	トレーラ	0.075	0.075	
13	不整地運搬車（クローラ型）	0.134	0.114	
14	クローラクレーン	0.076	0.076	
15	トラッククレーン（トラチスジブ型・油圧伸縮ジブ型）	0.044	0.045	オールテレーンクレーンを含む
16	ラフテレーンクレーン	0.088	0.075	



写真-12 バックホウ給油状況



写真-13 高品位尿素水補給状況



写真-14 グリス使用状況

(2) 深礎工

① 工法概要

深礎工は、地中に基礎杭を作るために円形の堅坑を掘削する方法であり、ライナープレートで土留めをしながら、内部の土を除去しつつ必要な深さまで掘り下げ、これにコンクリートを充填して基礎とする工法です。

② 主な改定概要

1) 施工歩掛

- ・施工機械の排出ガス対策型基準値の変動による見直し
- ・余掘り幅見直し（8 → 10 cm）に伴い、グラウト使用量等の見直し

表-9 掘削土留作業に使用する機械・規格

作業種別	機械名	規格	
		現行	改定
排土	クラムシェル	油圧クラムシェル・テレスコピック式・排出ガス対策型（第1次基準値） バケット容量（平積）0.4 m <sup>3</sup>	油圧クラムシェル・テレスコピック式・排出ガス対策型（第1次基準値） バケット容量（平積）0.4 m <sup>3</sup>
排土及び土留材の吊込み	ラフテレーンクレーン	油圧伸縮ジブ型・排出ガス対策型（第2次基準値） 25 t 吊	油圧伸縮ジブ型・排出ガス対策型 <u>（2011年規制）</u> 25 t 吊
	やぐら装置	簡易やぐら（モータウインチ付） 能力0.5 t	簡易やぐら（モータウインチ付） 能力0.5 t
掘削	小型バックホウ（クローラ型）	電動式 山積0.03 m <sup>3</sup> （平積0.021 m <sup>3</sup> ）	電動式 山積0.03 m <sup>3</sup> （平積0.021 m <sup>3</sup> ）
		超小旋回型・排出ガス対策型（第1次基準値）山積0.11 m <sup>3</sup> （平積0.08 m <sup>3</sup> ）	超小旋回型・排出ガス対策型 <u>（第3次基準値）</u> 山積0.11 m <sup>3</sup> （平積0.08 m <sup>3</sup> ）

表-10 グラウト使用数量

現行	改定
(2) グラウト使用量 次式を標準とするが、現場条件により次式が適用出来ない場合は、別途考慮する。 $G = 0.08 \pi (D + 0.08) \ell 2 \times 1.14$ G : 杭1本当りグラウト使用量 (m <sup>3</sup> /本) D : 杭径（公称径）(m) ℓ2 : 杭1本当りグラウト必要長 (m)	(2) グラウト使用数量 次式を標準とするが、現場条件により次式が適用出来ない場合は、別途考慮する。 $G = 0.10 \pi (D + 0.10) \ell 2 \times 1.14$ G : 杭1本当りグラウト使用数量 (m <sup>3</sup> /本) D : 杭径（公称径）(m) ℓ2 : 杭1本当りグラウト必要長 (m)



写真-15 小型バックホウによる掘削作業状況  
(B-2工法)



写真-16 グラウト注入状況

(3) 足場工

① 工法概要

足場工は、高所作業を行うための仮設の床及びその支持構造物を設置・撤去する工法です。一般的な土木構造物では、支柱足場の手摺先行型枠組足場、単管足場、単管傾斜足場が広く用いられて

います。

② 主な改定概要

1) 施工歩掛

- ・足場材設置・撤去における使用機械の規格に変動がみられたため、規格を見直し
- ・足場材設置・撤去の労務数量を改定

表-11 足場材設置・撤去歩掛

(100掛 m<sup>2</sup>当り)

現 行					改 定						
名 称	規 格	単 位	手 摺 先行型 枠組足場	単管足場	単管傾 斜足場	名 称	規 格	単 位	手 摺 先行型 枠組足場	単管足場	単管傾 斜足場
土木一般世話役		人	1.4	1.7	1.4	土木一般世話役		人	<u>1.6</u>	<u>1.9</u>	<u>1.5</u>
とび工		人	6.3 (7.7)	6.3 (7.7)	4.1 (5.6)	とび工		人	<u>7.0</u> (8.5)	<u>6.9</u> (8.4)	<u>4.5</u> (6.1)
普通作業員		人	1.2	1.6	2.5	普通作業員		人	<u>1.3</u>	<u>1.8</u>	<u>2.7</u>
ラフテレーン クレーン運転	油圧伸縮シブ型・ 排出ガス対策型 (第2次基準値) 25t吊	日	1.4	0.8	0.8	ラフテレーン クレーン運転	油圧伸縮シブ型・ 排出ガス対策型 ( <u>第3次基準値</u> ) 25t吊 <u>低騒音型</u>	日	1.4	0.8	0.8
諸 雑 費 率		%	34 (31)	32 (29)	35 (30)	諸 雑 費 率		%	34 (31)	<u>29</u> ( <u>27</u> )	<u>33</u> ( <u>28</u> )



写真-17 手摺先行型枠組足場



写真-18 単管傾斜足場

## (4) 浚渫工（バックホウ浚渫船）

## ① 工法概要

浚渫工（バックホウ浚渫船）は、スパッド付台船等に搭載されたバックホウで河床等の土砂を掘削し、掘削された土砂を土運船等に積込み、引船により曳航し、海上処分または陸上の処分場に揚

土する工法です。

## ② 主な改定概要

## 1) 施工歩掛

- ・浚渫土の揚土における使用機械の規格に変動がみられたため、規格を見直し

表－12 浚渫土の揚土作業における使用機種

機 械 名	現 行		改 定	
	作業種別	規 格	作業種別	規 格
バックホウ (クローラ型)	1日当り平均浚渫量 365 m <sup>3</sup> 以下	標準型・排出ガス対策型 (第1次基準値) 山積 1.4 m <sup>3</sup> (平積 1.0 m <sup>3</sup> )	1日当り平均浚渫量 365 m <sup>3</sup> 以下	標準型・排出ガス対策型 (2011年規制) 山積 1.4 m <sup>3</sup> (平積 1.0 m <sup>3</sup> )
	1日当り平均浚渫量 366 m <sup>3</sup> 以上 645 m <sup>3</sup> 以下		1日当り平均浚渫量 <u>365 m<sup>3</sup> 超え</u> 645 m <sup>3</sup> 以下	



写真－19 バックホウ浚渫船による浚渫作業



写真－20 浚渫土の揚土作業

## (5) ポストテンション桁製作工

## ① 工法概要

スパンが45 m以下の橋梁で、断面がT字形をしたプレキャスト桁を現場製作する工法です。現場製作したプレキャスト桁を架設し、上部フランジ及び横桁部に現場打ちコンクリートを打設、

PC鋼材で横締めして一体化させることで橋梁となります。

## ② 改定概要

- ・就業形態の変化（4週8休）に伴い、桁製作工に使用する緊張ジャッキ・ポンプ、門型クレーン、鋼製型枠等機械の供用日数を見直し



写真－21 門型クレーン



写真－22 主桁製作用型枠（鋼製型枠）

表-13 使用機械の供用日数算定式

現 行						改 定																											
5-1 機種を選定 ポストテンション桁製作工に使用する機械・規格は、次表を標準とする。						5-1 機種を選定 ポストテンション桁製作工に使用する機械・規格は、次表を標準とする。																											
表 5.1 機種を選定 (1工事当り)						表 5.1 機種を選定 (1工事当り)																											
作業種別	名 称	規 格	単 位	数 量	供用日数	作業種別	名 称	規 格	単 位	数 量	供用日数																						
緊張工	緊張ジャッキ・ポンプ	各 種	組	2	A	緊張工	緊張ジャッキ・ポンプ	各 種	組	2	A																						
門型クレーン工	門型クレーン電動ホイスト	3.0t吊 3.0t吊用	基 台	1 1	A A	門型クレーン工	門型クレーン電動ホイスト	3.0t吊 3.0t吊用	基 台	1 1	A A																						
主桁製作用型枠	鋼製型枠	ポストテンション桁用	m <sup>2</sup> ・日	必要量	A	主桁製作用型枠	鋼製型枠	ポストテンション桁用	m <sup>2</sup> ・日	必要量	A																						
A = 供用日数 = 0.16 × V × α + 20 V : コンクリート量 (m <sup>3</sup> ) α : 供用日補正係数 供用日補正係数は、下記による。						A = 供用日数 = 0.19 × V × α + 24 V : コンクリート量 (m <sup>3</sup> ) α : 供用日補正係数 供用日補正係数は、下記による。																											
<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">α</th> <th colspan="3">支間長 L (m)</th> </tr> <tr> <th>L ≤ 35</th> <th>35 &lt; L ≤ 40</th> <th>40 &lt; L ≤ 45</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>α</td> <td>1.0</td> <td>0.73</td> <td>0.60</td> </tr> </tbody> </table>						α	支間長 L (m)			L ≤ 35	35 < L ≤ 40	40 < L ≤ 45	α	1.0	0.73	0.60	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">α</th> <th colspan="3">支間長 L (m)</th> </tr> <tr> <th>L ≤ 35</th> <th>35 &lt; L ≤ 40</th> <th>40 &lt; L ≤ 45</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>α</td> <td>1.0</td> <td>0.73</td> <td>0.60</td> </tr> </tbody> </table>						α	支間長 L (m)			L ≤ 35	35 < L ≤ 40	40 < L ≤ 45	α	1.0	0.73	0.60
α	支間長 L (m)																																
	L ≤ 35	35 < L ≤ 40	40 < L ≤ 45																														
α	1.0	0.73	0.60																														
α	支間長 L (m)																																
	L ≤ 35	35 < L ≤ 40	40 < L ≤ 45																														
α	1.0	0.73	0.60																														

(6) プレキャストセグメント主桁組立工,

(7) PC 橋片持架設工

① 工法概要

[プレキャストセグメント主桁組立工]

工場または現場近くで製作したプレキャストセグメント（主桁を基数分割されたもの）を接着剤で圧着した後に PC ケーブル緊張を行い、グラウトを注入し主桁を製作する工法です。

[PC 橋片持架設工]

主桁を橋軸方向に 2～5m のブロック分割

し、架設用移動作業車を用いて、橋脚から片持ち梁を張り出す工法です。

② 改定概要

1) 施工歩掛

・PC ケーブルの長期耐久性や施工性向上等を目的に、高粘性グラウトから超低粘性グラウトへ使用するグラウト材の変動がみられたため、グラウト材及び使用機器等を変更

※プレキャストセグメント主桁組立工, PC 橋片持架設工ともに同じ内容です。

表-14 [例] プレキャストセグメント主桁組立工歩掛

桁種別	分割数	日当り施工量 (本/日)	
		現 行	改 定
中空桁	3	D = -0.1063 × H + 1.1 ただし H は 0.7 ≤ H ≤ 1.5	D = <u>-0.1095</u> × H + <u>1.13</u> ただし H は 0.7 ≤ H ≤ 1.5
	5	D = -0.1133 × H + 0.85 ただし H は 1.0 ≤ H ≤ 1.5	D = <u>-0.1167</u> × H + <u>0.88</u> ただし H は 1.0 ≤ H ≤ 1.5
T 桁 少数桁 PC コンボ桁	3	D = -0.1098 × H + 1.05 ただし H は 1.5 ≤ H ≤ 2.5	D = <u>-0.1131</u> × H + <u>1.08</u> ただし H は 1.5 ≤ H ≤ 2.5
	5	D = -0.0751 × H + 0.63 ただし H は 1.5 ≤ H ≤ 3.0	D = <u>-0.0774</u> × H + <u>0.65</u> ただし H は 1.5 ≤ H ≤ 3.0

D : 日当り施工量 (本/日)  
H : 桁高 (m)

表-15 諸雑費〔例〕プレキャストセグメント主桁組立工

現 行				改 定																											
<p>諸雑費は、接着剤、グラウト、コンクリート（端部）、型枠用合板、はく離剤等の材料費、表 6.1 の機械器具を除く雑機械の損料等の経費、プレキャストセグメント桁組立に必要な消耗品費、電力に関わる経費等の費用であり、労務費の合計額に次表の率を乗じた金額を上限として計上する。</p>				<p>諸雑費は、<u>プレキャストセグメント組立工にかかわる材料費</u>（接着剤、<u>グラウト材（超低粘性型）</u>、コンクリート（端部）、型枠用合板、はく離剤等）、<u>機械器具費</u>（表 6.1 の機械器具を除く雑機械（<u>重量台車（引き出し用：調整用）</u>、<u>レバーブロック</u>、<u>軌条</u>、<u>グラウトポンプ</u>、<u>ウインチ</u>、<u>ワイヤロープ</u>、<u>グラウト流量計</u>、<u>水槽</u>、<u>真空ポンプ</u>、<u>発動発電機</u>、<u>空気圧縮機等</u>）、消耗品費、電力に関わる経費等の費用であり、労務費の合計額に次表の率を乗じた金額を上限として計上する。</p>																											
<p>諸雑費率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分割数</th> <th>中空桁</th> <th>T 桁 少数桁 PC コンボ桁</th> <th>PC コンボ桁 (多径間)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3</td> <td>35</td> <td>37</td> <td>49</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>43</td> <td>39</td> <td>58</td> </tr> </tbody> </table>				分割数	中空桁	T 桁 少数桁 PC コンボ桁	PC コンボ桁 (多径間)	3	35	37	49	5	43	39	58	<p>諸雑費率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分割数</th> <th>中空桁</th> <th>T 桁 少数桁 PC コンボ桁</th> <th>PC コンボ桁 (多径間)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3</td> <td><u>65</u></td> <td><u>71</u></td> <td><u>82</u></td> </tr> <tr> <td>5</td> <td><u>76</u></td> <td><u>71</u></td> <td><u>87</u></td> </tr> </tbody> </table>				分割数	中空桁	T 桁 少数桁 PC コンボ桁	PC コンボ桁 (多径間)	3	<u>65</u>	<u>71</u>	<u>82</u>	5	<u>76</u>	<u>71</u>	<u>87</u>
分割数	中空桁	T 桁 少数桁 PC コンボ桁	PC コンボ桁 (多径間)																												
3	35	37	49																												
5	43	39	58																												
分割数	中空桁	T 桁 少数桁 PC コンボ桁	PC コンボ桁 (多径間)																												
3	<u>65</u>	<u>71</u>	<u>82</u>																												
5	<u>76</u>	<u>71</u>	<u>87</u>																												



写真-23 グラウトプラント設置状況



写真-24 グラウト注入作業状況

## 5. おわりに

公共事業を円滑に執行するためには、各工種の施工実態や資機材の需給状況など、変化する事象を的確に把握し、現場の準備や後片付けなどの作業のほか、工事の品質及び安全確保、環境の保全等に十分な配慮がなされているかにも着目したうえで、標準歩掛を整備していくことが必要です。

引き続き、必要な標準歩掛の改定・制定を行い、適正な予定価格が積算できるよう努めてまいります。

なお、標準歩掛は実際の施工における工法や施工機械を規定するものではなく、あくまでも標準的な施工を想定した予定価格を算出するためのツールです。このことを正しく理解し、適切な運用をお願いします。

本稿で紹介した改定の概要については、国土交通省ホームページ「土木工事標準歩掛」に掲載していますので、そちらもご参照ください。

### 【参考ホームページ】

土木工事標準歩掛 [https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/constplan/sosei\\_constplan\\_tk\\_000024.html](https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/constplan/sosei_constplan_tk_000024.html)